

交差的な生を生きぬくための承認をめぐるジレンマ ：「LGBT に受容的な国」出身のクィア留学生のアイ デンティティ交渉に着目して

澤田，彬良

筑波大学大学院人間総合科学学術院教育学(国際教育)学位プログラム：博士前期課程2年

<https://doi.org/10.15017/7178868>

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 27, pp.37-46, 2024-03-15. Seminar of Educational Sociology Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studies Kyushu University

バージョン：

権利関係：



交差的な生を生きぬくための承認をめぐるジレンマ ー「LGBT に受容的な国」出身のクィア留学生のアイデンティティ交渉に着目してー

Dilemmas over Recognition for Surviving an Intersectional Life -Focusing on the Identity Negotiation of Queer International Students from “LGBT-Friendly Countries”

澤田彬良

1. はじめに

社会的マイノリティの学生に関する研究において、近年、かれら（特定のジェンダーを指示しない語として、本稿ではひらがな表記を用いる）の経験の背景にある権力の交差性に着目する必要性が唱えられている。交差性（インターセクショナリティ）とは、Crenshaw（1989）が提唱した概念である。彼女は、権力構造の交差が、各人に特有の抑圧の経験を成すとし、交差的な権力構造を可視化する必要性を主張した。日本国内のマイノリティ学生として、「性的マイノリティの留学生（以下、クィア留学生）」に関する認識拡大の必要性が、支援や教育の現場から訴えられている（大西, 2019; 全国大学生協連合会, 2019）。クィア留学生は、ジェンダー・アイデンティティや性的指向に関する権力構造と、人種国籍民族アイデンティティに関する権力構造の交差点に置かれており、かれらに特有の問題経験は、交差性の視点から明らかにされてきた（Nguyen, Grafsky, & Lambert-Shute, 2017）。例えば、自国での差別意識の内在化や、家族や同郷出身者らとの軋轢、それらによる帰国時の葛藤などの問題経験が報告されており、これらの理解に基づいた支援や教育の提言がなされている（Valosik, 2014）。

一方で、これらの先行研究には限界もある。これまで蓄積されてきたクィア留学生に関する研究の多くは、そのほとんどが米国大学をフィールドとすることからも、LGBT に対して比較的に非受容的な国・地域から、比較的に受容的な国・地域への移動を検討対象としていた。そのため、その逆の移動（LGBT に対して比較的に受容的な国・地域から、比較的に非受容的な国・地域への移動）を行う者の経験については説明できていない。LGBT に対する受容度の異なる、「LGBT に受容的な国」出身のクィア留学生らは、出身国よりも LGBT に非受容的な国への留学を通して、いかなる経験をしているのだろうか。

本稿は、交差的な属性を有する学生の経験を理解するためには、アイデンティティに対する複雑な意味づけや表象調整に着目することが欠かせないとする Poynter & Washington（2005）の指摘に基づき、日本の大学における LGBT に受容的な国出身のクィア留学生の経験を、かれらのアイデンティティ交渉に着目して記述する。アイデンティティ交渉とは、二者間以上の社会的相互行為において、それぞれが望むアイデンティティの獲得を目指して、社会的・個人的アイデンティティの表象を調整する行為を指す（Swann, 1987）。本稿は、LGBT に受容的な国出身のクィア留学生が、クィアらしさを不可視化することで、外国人としての承認獲得を目指すこと、さらに、そのような戦略を取ってもなお外国人としての承認を得られないという気づきに基づき、承認要求の放棄と継続の狭間で葛藤していることを描き、クィア留学生の承認をめぐるジレンマを論証する。

本稿の構成は次のとおりである。まず第 2 節では、クィア留学生に関する先行研究を紹介し、クィア留学生に特有の経験を整理する。第 3 節では、アイデンティティ交渉理論と承認について触れ、クィアに特有のカミングアウト概念と統合しながら、社会的アイデンティティに対する承認獲得を目指す行為としてのアイデンティティ交渉について整理する。第 4 節では本研究の研究手法と研究対象について述べ、第 5 節で、LGBT に受容的な国出身のクィア留学生の経験と承認をめぐるジレンマについて、アイデンティティ交渉に関する語りをもとに記述し、考察を加える。その後、本研究のまとめと課題、今後の研究に関する提言を行い、本稿を閉じる。

2. クィア留学生に関する先行研究

クィア留学生の経験について、主に米国大学を調査地とした検討がこれまでになされてきた。初期の文献に

は、クィア留学生の問題経験と、かれらを支援するカウンセラーへの啓発事項をまとめた Oba & Pope (2013) の論考がある。Oba らは、臨床で得た知見をもとに、クィア留学生に特有の問題経験を、①アイデンティティ形成、②人間関係の課題、③健康面の問題、④帰国時の葛藤の4点から説明する。具体的には次の通りである。まず、多くのクィア留学生の出身国は、LGBT に非受容的な国であり、そのような出身国での暮らしは、異性愛主義や同性愛嫌悪の内在化や、セクシュアリティに関する知識の欠落を導く。これにより、多くのクィア留学生は性的アイデンティティの形成を出身国で経験しない。そのためかれらは、米国への留学中に、自身の性的アイデンティティといかに向き合うべきかという点で葛藤を抱えやすくなる (①)。また、留学時には、コミュニケーション文化に関する出身国、留学国の間の差異により、カミングアウトの可否の選択に戸惑いを覚えたり、それが人間関係上の困難を生んだりするという (②)。そして、セクシュアリティに関する知識の欠如や、留学先での言語障壁、受診時のカミングアウトに関する戸惑いによって、クィア留学生の性に関する健康問題は、深刻化・長期化を招きやすい (③)。たとえ、留学生生活を謳歌できた場合でも、出身国が留学国 (米国) よりも LGBT に非受容的な環境にあることから、かれらにとって、帰国することはそうした環境に再適応を迫られることを意味する。そのため、帰国に伴うアイデンティティ・行動の再制限に対し、不安や葛藤の念を覚えるのだという (④)。

上記 4 点の問題経験は複数の調査で繰り返し報告されており、クィア留学生に関する研究の体系的レビューを行った Nguyen, Grafsky, & Lambert-Shute (2017) は、クィア留学生に特有のこれらの経験を、「留学生という身分と、性的指向の交差性」による交差的困難とする (81 頁)。さらに、Nguyen らは、この交差的困難の一つの例として、コミュニティの欠如を指摘し、クィア留学生は、クィアコミュニティからも、留学生コミュニティからも疎外されていると指摘した。クィア留学生がコミュニティから疎遠化する背景としては、米国に住む同郷出身者に性的アイデンティティを知られることの回避、留学後の帰国を見越して、出身国に住む人々に自身の性的アイデンティティが知られてしまう恐れのある活動の忌避が語られ、こうした回避行動によるコミュニティの欠如が、クィア留学生の孤独感の大きさに影響していると指摘されている (Herridge, Garcia, & Leong, 2019)。

以上のように、先行研究からは、クィア留学生はその交差的な属性ゆえに特有の問題を経験していることが

わかる。しかし、そのような困難のなかにあっても、クィア留学生は様々な方法を駆使しながら、困難への対処を試みている。例えば、Herridge, Al-Sharif, Leong, & Garcia (2023) は、クィア留学生が、コミュニティ欠如を経験し、帰属意識を感じる場がないという、先の研究に重なる困難を描出しつつも、かれらが「修正された振る舞い (modified behaviors)」等の対処戦略を活用して、困難に対処していることを明らかにしている (105 頁)。Herridge らの調査で確認された「修正された振る舞い」には、人種差別的言動をとる他者から距離をとったり、自ら交流を制限したり、自分のアイデンティティを隠したりすることで、それ以上困難を経験しないようにする対処が含まれる。つまり、クィア留学生は、自らのアイデンティティの多面性を戦略的に調整したり、他者との交流のあり方を変更したりすることで、困難に直面しないように振る舞うのである。

ここまでで確認した先行研究は、クィア留学生の経験を知る上で非常に示唆に富む一方、調査地が米国大学に限定されているという点で、日本の大学におけるクィア留学生の状況を説明するには限界がある。

日本の文脈でクィア留学生について検討した文献として、大西 (2019) がある。大西は、クィア留学生の出身国の文化や価値観によって、表出する問題や、支援利用の方略に差異があることを認め、「多様な性の在り方の尊重を当然の人権とみなす社会から来日した学生」(「LGBT に受容的な国」出身のクィア留学生) の留学経験への着目も重要であるとする (11 頁)。米国大学を調査地とする先行研究の多くは、米国よりも比較的 LGBT に対して非受容的な国から来たクィア留学生を調査対象としている。これは、州や郡、時代による差こそあれ、制度および歴史的な要素から、米国が比較的 LGBT に受容的である (と了解されやすい) ことに由来する。実際に、前述の先行研究でみられた「帰国時の葛藤」や、出身国の人々や同郷出身者を意識した回避行動による「コミュニティ欠如」は、LGBT に非受容的な国が出身国であることに由来すると考えられる。

一方、日本は、米国に比べて、「LGBT に (比較的) 受容的な国」出身のクィア留学生にとっての留学目的地になりやすいと考えられる。日本では 2023 年に「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律 (通称、LGBT 理解増進法)」が施行されたものの、依然として同性間の婚姻は許されておらず、LGBT に対する差別を取り締まる法律も存在しない (正確には、差別禁止法制定の声があがったが、政治的議論の後に「理解増進法」に改案された)。

また、クィア留学生にとって最近接の社会となりうる大学においても、日本の場合、LGBT 支援センターの設置や、理解増進のための授業開講は極めて局所的であり、国内大学全体でみれば、LGBT 支援は限られている（日本学生支援機構, 2022）。「LGBT に受容的な国」出身のクィア留学生は、日本の大学においていかなる経験をしているのだろうか。

次節では、Herridge ら（2023）の調査で明らかとなった、クィア留学生の対処戦略としての「アイデンティティ交渉」に焦点を当てる。その際、文脈に応じてアイデンティティを流動的に表象する行為の意味について、承認論の視点から議論を進める。

なお、本稿がここまで活用してきた、LGBT に対する「受容的／非受容的」という曖昧な二分法については、研究対象を概説する第4節にて更なる説明を加え、多国籍比較の調査をもとに道具的な定義と尺度を設ける。

3. アイデンティティ交渉と承認

自身が誰であるかという観念は、「アイデンティティ」として概念化され、心理学や社会学を中心に検証されてきた。教育学の文脈においては、大学生のアイデンティティ発達を研究する Jones & Abes（2013）が、誰もが多面的なアイデンティティを有しているという前提に立ち、「アイデンティティの複次元モデル」を提示した。かれらによると、アイデンティティとは流動的かつ輻輳的な概念であり、他のアイデンティティや社会的文脈との関係の中で揺れ動くものである。

アイデンティティは発達するものとして理解されるのみならず、日常的行為や社会的相互作用の場面において、振る舞われるものとしても理解される。Goffman（1959）が、パフォーマンスとして捉えたアイデンティティがこれにあたる。異文化間コミュニケーション研究においては、アイデンティティが振る舞われる側面に焦点を当てた「アイデンティティ交渉理論」が提唱されている。本理論の提唱者である Ting-Toomey（1986; 2017）は、全ての個人はコミュニケーション場面においてアイデンティティの承認を求め、この承認への切望を満たすために、言語的・非言語的情報の調整を行うとし、これを「アイデンティティ交渉」と名付けた。本理論を活用した多くの研究は、移民や海外短期滞在者が、文化圏越境の中で経験する緊張や困難の経験に焦点を当ててきた。例えば、Collie, Kindon, Liu, & Podsiadlowski（2010）は、イラクからニュージーランドに移住したアッシリア人の女性たちが、両国や友人集団それぞれへの包摂を求

めて、自らのアイデンティティを複雑かつ慎重に位置付けながら暮らしていることを明らかにした。また、留学生の文化適応を本理論の観点から研究した Hotta & Ting-Toomey（2013）は、アメリカ人現地学生から異質な者としてみられる被他者化の感覚と、「価値あるゲスト」（562頁）、つまり、尊敬や注目に値するアイデンティティとしての承認を求める感覚とのジレンマの中で、留学生らがアイデンティティを巧みに交渉することを明らかにした。

重要なこととして、自身からみた自らのアイデンティティと、他者からみたそれとが、常に一致するわけではない。これらの一致を目指す際に、カミングアウトという交渉法が取られる場合がある。砂川（2018）は、異性愛中心的な既存の社会においては、承認の基準さえも異性愛を規範としているとし、カミングアウトが、非異性愛／非シスジェンダーとしてのアイデンティティおよび自らの生き方に対する承認を求める行為としての意味を持つことを示唆している。つまり、カミングアウトによる親しい二者（または多者）間の「出会い直し」（26頁）は、クィアな個人とカミングアウトを受けた個人との間で、承認を巡る関係構築の端緒として機能するのである。

4. 研究手法と研究対象

本稿ではここまで、「LGBT に受容的／非受容的な国」という語を用いて、先行研究の整理をおこなってきた。ここでの「受容的／非受容的」は、固定的・画一的な区分では決してなく、相対的な区分である。この前提を踏まえつつ、研究対象を特定するために、本研究では、この区分を便宜的に用いる。

各国のLGBTに対する寛容度について、世界規模の比較調査を行ったプロジェクトとして、「LGBTI Global Acceptance Index（以下、GAI）」がある⁽¹⁾。このプロジェクトは、Andrew R. Flores（2021）客員研究員を中心に、カリフォルニア大学ロサンゼルス校・ウィリアムズインスティテュートの調査チームによっておこなわれた。GAIは、研究手法や指標、統計処理による妥当性評価の公表をおこなっており、各国のLGBTに対する寛容度を概観するための一つの指標として活用できる。調査には、各国・各地域の多様なサーベイが活用され、LGBTIの人々およびかれらの権利に関する公共政策に対する国民の態度が数値化されている。本プロジェクトでは、日本よりも比較的LGBTIに寛容な国として評価された国は52カ国あり、そのうちインタビューの出身国に該

当するのは、アメリカ、オーストラリア、スイス、フィリピン、シンガポールであった。なお、LGBT への寛容度を国単位で厳密に評価することは難しく、各人が育った環境やそれを構成する人々との関わりのなかで、知覚された寛容度は様々となることは考慮しておきたい。

本稿では、2023 年 12 月から 2023 年 8 月に実施したクィア留学生を対象とするインタビュー調査（筆者所属大学倫理審査委員の承認を得てから実施）から、前述の基準に照らして、5 名のインタビュー어의語りを分析の対象とした。インタビュー어は、現在日本の大学に留学している者と、過去に留学していた者とがおり、後者には帰国した者と、日本に残って生活をしている者がいる。研究参加者の募集については、「クィア×移民」をテーマとした SNS 上のグループにて調査協力依頼を掲載し、協力を申し出てくれた者を対象とした。かれらには事前に研究目的と内容を説明し、同意書の提出があった者にインタビューを行った。対象とした 5 名に関する基本情報は、次のとおりである。

Linda は、アメリカ合衆国出身のアセクシュアル・アロマンス（無性愛：性的欲求・恋愛感情を抱かない）のシスジェンダー女性である。学部卒業まではアメリカで育ち、修士・博士課程を日本の地方国立大学で過ごしている（現在も在学中である）。日本での生活は 5 年目だが、日本語学習の経験はほとんどなく、日本語は「全く話せない」という。まだ将来のことはわからないと話すが、アメリカに戻る気持ちの方が、日本に留まりたい思いよりも大きいという。

Null は、オーストラリア出身のクィア、レズビアン・ノンバイナリー、ジェンダークィア（ここでの「クィア」は、異性愛・シスジェンダー以外の非規範的性全般を指す言葉であり、そのうちのいずれかに固定しないことを意味する）である。Null は、学士課程で 1 年間、日本の地方国立大学へ交換留学をしており、学部卒業後に日本の地方部で就労をおこなった。その後、都市部私立大学の修士課程に進学した。Null は日本語能力試験 N5 を取得しているが、日常会話の日本語はついていくのが難しいという。将来は、日本とオーストラリアを含む多数の国を移動しながらキャリアを積みたいと考えている。

Gabriel は、スイス出身のゲイ・シスジェンダー男性である。彼は、高校卒業後数年間スイスで仕事をしてしたが、20 代半ばから渡日し、都市部私立大学の学士課程に在学した。渡日時には日本語をほとんど話せなかった Gabriel だが、留学中にゲイクラブでのアルバイトを通して日常会話をそつなくこなすほどの日本語を身につけた。現在帰国中の彼は、日本には戻らず、ヨーロッパの

いずれかの国で生きていくことを計画している。

Glory は、フィリピン共和国出身で、性的指向はバイセクシュアル（両性愛）、パンセクシュアル（全性愛）、ノヴォセクシュアル（性的指向を確信しない、またはできない）を自認する。また、ジェンダー・アイデンティティについては、広義のトランスジェンダーであり、ノンバイナリーやジェンダーフルードと称することもある。修士課程から日本の都市部私立大学に進学し、日本語は簡単な日常会話はできる程度であるという。卒業後は日本での就職を成功し、今後も日本で生活したいと考えている。

Lee はシンガポール出身のレズビアン・シスジェンダー女性である。学士課程の間に 6 ヶ月間の日本留学を経験し、学部卒業後に修士課程を日本ではじめた（現在も在学中である）。日本で通った大学はいずれも都市部の私立大学である。日本語能力試験は一度目の留学時が N5、二度目は N4 であり、簡単な日常会話はできる程度であるという。Lee は、学士課程の間は日本に移住する気持ちが大きかったというが、修士課程に入り長期的に日本に滞在するなかで、迷いも生じているという。

以上、5 名のインタビューデータについて、データの分析に際しては佐藤（2008）に倣い、帰納的アプローチと演繹的アプローチを往還させ、定性的コーディングによる分析を進めつつ、データ収集、分析、分析枠組みの再/構築を並行しておこなう「漸次構造化法」を用いた。例えば、前節の「アイデンティティ交渉」と「承認」の理論および概念は、語りを分析するなかで、立ち上がったコードに対し（帰納的アプローチ）、効果的な説明機能を有するものとして採用するに至った（演繹的アプローチ）。論文執筆にあたっては、英語での語りは筆者が翻訳し日本語で記述した。

なお、以下のインタビューデータの記述については、イタリック体で語りの引用、...で中略、() で筆者補足を示す。

5. 「LGBT に受容的な国」出身のクィア留学生の経験

5.1 出身国での経験—受容的環境とアイデンティティ

LGBT に受容的な国出身のクィア留学生の多くは、LGBT が比較的可視的な存在として表象される社会での生活を経験している。例えば、アメリカ合衆国出身の Linda の場合、「どこに行ってもレインボーフラッグが目に入るし、皆、開放的にそのこと（LGBT に関する話題）を話している」として、出身国における LGBT の可視性を強調する。

また、LGBT に対して比較的に受容的な環境で暮らし

てきたかれらの多くは、出身国で自らのクィア・アイデンティティを受容してくれる他者と既に出会っており、その存在を、自らにとって重要な他者として物語る姿も確認された。

Null 私の出身地は A っていうオーストラリアでも大きな都市だから... 家族にはカミングアウトしているし、私の家族は私のことを受容してくれている。そういうセーフティネットがある。

Linda (アメリカでの) 学部の親友は、2 人ともオープンリー・ゲイで、こういう話 (LGBT に関する話題) も開放的に話すし、私の経験とかも喜んで聞いてくれて... 実は、私にアセクシュアルって言葉を教えてくれたのも、その人たちなの。

Oba & Pope (2013) は、LGBT に対して抑圧的な文化を有する出身国で生活してきたクィア留学生は、クィアとしてのアイデンティティ形成を留学時に経験することとなり、これが葛藤を生むと指摘する。しかし、インタビューーらのこのような語りからは、LGBT に受容的な国出身のクィア留学生らが、クィアとしてのアイデンティティを留学開始以前に形成してきたことを示唆している。

さらに、比較的早期のアイデンティティ形成と出身国での重要な他者との心理的紐帯は、留学時の振る舞いに対する心理的資源として機能していることも窺える。

Null 私にはセーフティネットがあるから、(クィアであることで) 日本で嫌がらせを受けたりして、それに反発して例えば停学とか解雇されたとしても、最終的には家族が居るから大丈夫って思えたり。

かれらの語りからは、日本社会の LGBT に対する寛容度に左右されない、自身の強さと恵まれた環境を強調する姿勢がみられる。しかし、かれらは本当に、日本社会が有する権力構造から自らを自由にして生活することができているのだろうか。

5.2 日本への適応とクィアネスの不可視化

インタビューーの多くは、困難や苦しみではなく、留学生生活を生き抜く自らの主体性を強調した。なかでも、多くのインタビューーが共通して語るのは、日本社会に適応した振る舞いの選択である。例えば Lee は、日本社会に適応しようとする自らの姿勢を他の外国人と比較

しながら次のように語る。

Lee 私は、全く日本語を勉強せずに、外国人とだけ遊んで、日本に住んでいるけど精神的には自国を全く離れていない、みたいな「固定観念的な外人」ではない。

Lee は、「固定観念的な外人」像と自らを対置しながら、日本社会や文化への適応・統合を目指す自らのあり方を肯定的なあり方として意味づける。ここでは、日本社会や文化のあり方を学び取る真摯な姿勢が、Lee にとっての良き外国人像として想定されていることが窺える。

このような良き外国人像としての「日本への適応」は、他のクィア留学生からも聞かれる。例えば、Glory は、フィリピン出身であり、「クィアな人が沢山いる環境」で育ってきたこともあり、「カミングアウトしてもいいんじゃない」という感覚で過ごしていた。しかし、日本人の彼女と対話を重ねる中で、Glory のカミングアウトに関する考え方は、日本的価値に適応していくこととなる。

Glory 私は二人の関係とか性的指向を秘密にしたくなかったから、「言えればいいじゃん」とか「隠す必要はない？」とか (彼女に) よく言っていた。でも、彼女はいつも、「迷惑をかけちゃう」みたいなことを言っていて。それで、皆に理解してもらおうとすること自体、「調和を乱してしまう」みたいな考え方があるんだなって、少しずつ気づいてきて。

Glory は、カミングアウトをすることが他者に「迷惑をかける」ことになる、という彼女の考え方に触れ、日本的な価値観としてこれを受容した。それ以来 Glory は、「調和を乱すようなリスクを取りたくない」と感じ、カミングアウト行為を控えるようになっていったという。カミングアウト行為を巡るこの変容は、Glory が、日本社会の文化や価値観に出会い、それらに自らを適応させようとするなかで生じたものと理解することができる。

「調和を乱す (disrupting the harmony)」ことへの忌避感、Glory の他にも Linda や Null からも聞かれたものである。かれらは、「日本社会では他者を混乱させてはならないというプレッシャーが強い」(Linda) ことを認識し、自らの存在が他者を混乱させ、調和を乱しうるものであると意味づける。そのため、出身国では当然視してきたカミングアウト行為を日本では避けるようにし

て、調和を乱さないように振る舞っているようだ。

クィア・アイデンティティを秘匿にするための方法は、カミングアウトの忌避だけではなく、身体的な振る舞いの調整としても表出する。Null は、オーストラリアでは「明からさまにゲイっぽく振る舞っていた」のに対し、日本では、その振る舞いを控えめにしていた。

Null 日本では、ゲイっぽさを極端に控えめにしようにしていた。...いつも自分が外国人であることを意識していて、自分が何か粗末な振る舞いをすれば、日本にいる外国人全員に対する印象を悪くしてしまうから。だから、ゲイっぽさを控えめにしていたんだ。

Null の語りからは、外国人という身体的な有徴性の認識と、日本人からの外国人への印象に、自らが影響してしまうことへの気づきがみられる。注目すべきは、ゲイらしさを控えることが、外国人に対する悪い印象を持たせないための方法として語られていることだろう。つまり、Null は、日本人が、ゲイらしさの明白な表象に対して負のイメージを有しており、このイメージを外国人性と結びつけられてしまうことを避けようとしていたと考えられる。

以上のように、カミングアウトの忌避やクィアネスの表象緩和を通じて、日本的な価値観に適應させたアイデンティティを表現しようとする姿がクィア留学生の多くからみられた。このようなアイデンティティ交渉はいかなる目的に支えられているのだろうか。

5.3 承認をめぐるジレンマ

クィアネスを不可視化し、調和を乱さないように振る舞うというアイデンティティ交渉の動機について、Glory が示唆的な言葉を残している。

Glory 外国人としてはやっぱり現地人からの承認への切望ってすごく強くあって。もちろんクィア・アイデンティティを犠牲にしたいわけではない。けれど一方で、安全策を取りたいというか。...カミングアウトをすることで、その人との間の空気みたいなものを壊してしまうのは避けたい。

日本人の彼女との対話を通して、出身国フィリピンで身につけたカミングアウトに対する意味を変容させた Glory は、カミングアウトが日本では調和を乱す行為と

見做されると考え、日本人に対しては自らの性的指向をカミングアウトしないようにしていた。しかし、ここの語りは、「外国人として」の「承認」を得るために、Glory が本当は大切にしたいと考えている自らの「クィア・アイデンティティ」を可視化することはできない、という Glory の内なる葛藤を示唆している。

移民研究では、移民／外国人の国家帰属の相応しさが判断される要素として、「移民動機」、「法的地位」、「移民の脆弱さ」に加えて、「道徳的品性」と「社会的近接性」の5つが挙げられている (Willen & Cook, 2016; 103 頁)。

どのような振る舞い、態度、言動が道徳的に善とされ、悪とされるかは地域や時代、具体的文脈によって異なり、これは「文脈固有の道徳的位相 (a vernacular moral register)」(Willen & Cook, 2016; 96 頁) と呼ばれる。それぞれの文脈には、帰属の相応しさを訴え承認を求める者とその可否判断を下す者とが存在し、個人が承認を得るためにはその判断者との間の社会的近接性を強く示す必要がある (Flores, 2021)。

本研究が対象としたクィア留学生らの振る舞い—クィアであることを隠すことで調和を乱さないという日本的な道徳的品性をアピールし、日本社会への帰属にふさわしい外国人としての承認を得ようとする振る舞い—は、次のように読み替えられる。つまり、クィアネスを不可視にし、日本の文脈に沿った道徳的位相を自らが体現していることを示すことで、日本人や日本社会へ自らの社会的近接性を訴えるというものである。

本研究の対象者であるクィア留学生のなかには、留学期間のみ日本に滞在する短期滞在者 (sojourner) と、留学終了後も日本での生活を計画する潜在的な移民 (migrants) とがいる。しかし、いずれのインタビューからも、承認を得るためのアイデンティティ交渉の経験が聞かれたことは特筆すべきだろう。

以上のように、クィア留学生らは、自らのクィア・アイデンティティへの承認と引き換えに、外国人としての承認を得ようとするという戦略的行動をとっていることがわかった。

しかし、このような承認をめぐる戦略は、必ずしもゼロサムゲームになるわけではない。調和を乱さないために、日本ではほとんどカミングアウトせず暮らしている Linda は、研究室での人間関係に言及しながら次のように話す。

Linda 研究室では完全にクローゼット (性的指向をオープンにしていない状態) で、それもあってほとんど自分のことは話していないみたい。...

研究室の誰とも友達ではない感覚。...一つ言えるのは、研究室で私が唯一の西洋人で、唯一の女性だし、もしかすると日本人の皆は私に英語で話しかけるのも気まずいと感じているんじゃないかなって思う。

Linda は、出身国（アメリカ合衆国）での振る舞いと比べ、日本のコミュニティでは極端に自身のクィアネスを控えた振る舞いを行っている。「息がつまる思い」をしてまで Linda がこのように振る舞うのは、前で考察したように、社会的近接性と道徳的品性を示すことによる外国人としての承認を得るためと考えられる。しかし、ここでの語りは、自らの性的指向に紐づいたパーソナルな領域の会話が研究室のメンバーとできておらず、それによって研究室において友人関係を築けていないという状態に陥っていることを示している。さらに、研究室で「唯一の西洋人」であり「唯一の女性」であるという二重、三重のマイノリティ性と、言語障壁が理由となり、クィア・アイデンティティへの承認と引き換えに求めた外国人としての承認についても、結局は得ることができていない。大学院生であり、日本国内での人間関係が研究室にほとんど限定されている Linda にとって、この現状は結果的に、「外国人としての孤独に加えて、クィアとしての孤独」(Glory)を生み出しているといえる。こうした承認をめぐるジレンマは、交差性のなかにおかれたクィア留学生の経験として注目すべき点といえるだろう。

5.4 同化と異化のアイデンティティ交渉

前項でみたように、クィア留学生は承認をめぐるジレンマの中に身をおきながら、日本社会において自身が承認されるべきという相応しさを表現している。しかし、相応しきの主張は必ずしも承認獲得に結実するわけではなく、幾重にも承認を得られないこともある。

かれらは、たとえいかなる戦略を用いても、承認を得られない可能性が常に存在することに気がついている。例えば、Null はクィアとしての承認と外国人としてのジレンマから自らの身を切り離す術について、次のように語る。

Null (ゲイっぽさを控えめにする) 一方で、自分のなかにはもう一つの振る舞い方もあって。「どうでもいいや」って。「どうせ誰も私のことを「日本人」だとは思わないんだから、どんな振る舞いをしてでもいいや、だってどうせ日本では

外国人としてしか扱われないんだから」って思う自分もいる。

Null が「外人スマッシュ (Gaijin Smash)」と呼ぶこの振る舞いは、クィアネスを不可視化することで外国人としての承認を得ようとする戦略をとってまなお、日本社会や日本人からは同質集団と見做してもらえないことに気づき、その諦観に基づいて自己の他者性を強調することで日本社会の道徳的品性から解き放たれんとするものである。同様の語りは、Lee からも聞かれる。

Lee 私は、結局のところ日本人にはなれない。もちろん文化や振る舞い方を学ぼうとはするけど、100%同化することはできない。日本人っぽいこともするし、日本人っぽくないこともする。もちろんルールや文化的なニュアンスには従ってきたつもりだけどね。だから「異質」って思われても仕方ないって割り切ることもある。

日本文化を学び、それに適応しようとする Lee は、「固定観念的な外人」像と自らを対置させて、日本社会で求められるクィアとしての振る舞いを学びとってきた。しかし、クィアネスを不可視にすることで日本人や日本社会への同化を図っても、「結局のところ日本人になれない」という強烈な断層を自らと日本人との間に感じつけており、そのため、自主的に自らを異化することで、「私は私」と意味づけるようになっている。このような差異の積極的引き受けは、「どんな振る舞いをしてもいい」(Null) という、自己の振る舞いに関する自由の余地を復活させ、クィア・アイデンティティの強調を正当化する自己内論理として機能している。

日本人から同集団の者と見做されないという感覚は、かれらが留学経験を通して日常的に学びとっているものだろう。本研究のインタビューーはみな、大学での友人関係や、研究室での人間関係、を振り返りながら、日本人や日本社会との心理的な断層を感じていたことを語る。その断層は、言語障壁による分かり合えなさ、履修科目や居住環境等における留学生と日本人学生の構造的な棲み分けなどと共に、LGBT に対する考え方や反応の差異に触れるなかで学びとられているようだった。受け入れ社会における社会的資源へのアクセスの有無、差別や排除の制度的／日常的表象などが、「承認の文脈」を構築しており、これらの文脈によって移住者らの被承認感が形成される (Portes & Rumbaut, 2014; Stepick, Grenier, Castro, & Dunn, 2003)。

前項では、クィア留学生らが日本社会からの承認を求め、同化を図るために、クィアネスを不可視にするというアイデンティティ交渉を確認した。一方、本項では、日本社会や日本人による外国人への承認は、必ずしも同集団の者としての承認を意味せず、そのことに意識的なクィア留学生らが、同化と異化を使い分けるというアイデンティティ交渉をおこなっているということが明らかになった。ここでのアイデンティティ交渉は、日本社会への帰属に相応しい外国人像と、クィア・アイデンティティの対立という構図をとることが窺われる。より詳細には、承認の与奪を判断する者（日本人）によって帰属の相応しさを認められないことから、クィア・アイデンティティをそれそのものとして表現することで、異質な他者としての主体性を回復させるものである。アイデンティティ交渉による自己の異化は、承認を求める者（クィア留学生）と承認を与える者（日本社会ないし日本人）との間の非対称的な権力関係から自らを切り離し、「私自身という特有の位置」(Lee) を社会の中に築く方法と考えられる。

「私はGabriel。それだけって感じることもある。もしかしたらアイデンティティとかないのかも。」と語るGabrielのように、自らの異質性を主張するアイデンティティ交渉の末に、留学生やクィアという社会的アイデンティティから距離をおき、それらに対し自らが非関与であるように振る舞うクィア留学生の姿は、Berger (1966) が「距離化 (distance/role distance)」に分類した印象操作の方法に重なる。脱アイデンティティの議論を進める上野 (2005) はこの概念を引きつつ、「距離化」による印象操作を「客観的には何の効果も持たず、たんなる逃避にしかならないことが多い」(23 頁) と意味づけているが、はたしてそうなのだろうか。むしろ、「私は私」という主観的な意味づけを調査者に語り、唯一無二の自己を言語的・身体的に振る舞う (perform) ことが、パロディとしての自己を構築させるとは考えられないだろうか。この「私」の反復的振る舞いは、振る舞いの対象となる他者の視点をも巻き込んで、「私」を (再) 構築する。つまり、承認与奪の判断をくだす他者の視点を巻き込むこのようなアイデンティティ交渉は、日常的世界のなかの「承認をめぐる闘争 (the struggle for recognition)」(Honneth, 1995) であり、対他的な影響力を持ちうるものと考えられる。

6 おわりに

我が国の高等教育において、学生の多様化に伴う多様性包摂の必要性が叫ばれるようになって久しい。なかで

も、留学生受け入れを積極的に推進する政府の方策は、留学生人口の増加を導き、留学生内部の多様化への対応が喫緊の課題となっている。一方、2015 年の一橋大学法科大学院で起きた性的マイノリティ学生の子殺事件は、高等教育機関を含む学校組織における LGBT を取り巻く悲痛な現状に焦点を当てる契機となった。このような背景からも、現在、ダイバーシティ&インクルージョン (多様性包摂) 推進は多くの大学にとって重要政策に据えられている。しかしながら、教育現場においても研究調査においても、単一のマイノリティ性に焦点をあてることがほとんどであり、複数のマイノリティ性が重なる個人に対する認識的不正義が温存されてきた。また、インターセクショナルリティ研究を含む、マイノリティに関する研究の多くが、強烈なエピソードに着眼する傾向を有するなかで、それゆえに見落とされてきた、大きな困難を抱えにくいと想定される層への着目も重要な課題である。

本研究は、米国を中心に理論の精緻化、実証研究が進むインターセクショナルリティの視点を取り入れ、交差的な抑圧構造の渦中にあると想定されるクィア留学生の経験に焦点を当てた。さらに、米国を中心としたクィア留学生に関する先行研究が見落としてきた、大きな困難を抱えにくいと想定される層としての、「LGBT に受容的な国出身のクィア留学生」にそのスコープを絞った。

その結果、先行研究で指摘されてきた出身国での困難の経験はほとんど聞かれず、むしろ心理的資源として出身国のコミュニティを語る、比較的恵まれた姿を確かに描出することができた。しかしその一方、外国人としての承認とクィアとしての承認をめぐるジレンマのなかで、いずれかのアイデンティティを脱表象することで自己の帰属感を主張する姿や、それでもなお承認を得られないことへの気づきから積極的に自己を異化することで承認をめぐる権力構造から解放されんとする姿もみられた。つまり、たとえ「LGBT に受容的な国」の出身であっても、留学先の国や大学において多層的な権力構造の渦に巻き込まれ、時には、いずれのアイデンティティに対しても承認感を得られないことによる孤独に苛まれる場合があるということが明らかになった。日本社会や日本人から承認を得るためにアイデンティティの交渉をおこなう一方で、どこまでも同集団としての承認を得られないことを強く突きつけられる日本での日々は、クィア留学生を、〈日本社会に適応した道徳的品性を有する外国人〉と〈日本社会に馴染まない奔放なクィア外国人〉の狭間というジレンマのうちにとどめる。このジレンマの中で、いずれの社会的アイデンティティか

らも自らを切り離し、「私自身」を主張し振る舞うことで、承認をめぐる闘争を、アイデンティティ闘争から切り離す姿は、日常的世界における静かなる政治を表象する。

本研究には次のような課題がある。まず一点目に、「LGBTに受容的な国」という概念自体の限界性である。本研究では、受容度の基準を Flores (2021) らが統計分析を行なった LGBT に対する受容度の各国比較調査に求め、従来のクィア留学生研究が焦点を当ててこなかった対象に着目するために便宜的に本概念を活用した。しかし、第4節でも述べたように、国家単位で受容度を措定することは難しいことや、その環境が受容的か否かは、個人が生活のなかで経験する社会的相互作用によって主観的に構成される要素が強いことには注意が必要である。それと同時に、先述のとおり、「多様な性の在り方の尊重を当然の人権とみなす社会から来日した学生」の生活経験に着目することの重要性も無視できない(大西, 2019; 11 頁)。本研究は、その限界性を認めながらも、LGBT に対する受容度という概念を用いて、研究対象を選定することで、これらの学生の主体性とジレンマを描き出すことができた。

二点目は、承認をめぐるジレンマに関わるアクターの影響の程度や相互作用を議論することが難しいという点である。本研究はインタビューデータを主な分析材料として、LGBT に受容的な国出身のクィア留学生の承認をめぐるジレンマを検討・考察した。そのため、かれらが経験した各場面において、その場面に影響した他のアクターの視点を取り入れたデータを扱うことはできていない。そのため、今後は参与観察などのフィールドワークの技法を用いて、各アクター間の間主観的な視点からデータを蓄積することで、より詳細で包括的な因果関係を描出することを目指される。

今後の研究としては、クィア留学生の承認要求に対して、承認与奪の判断をくだす者の視点を補完する研究が求められる。具体的には、日本人クィア学生や教職員等の視点を研究枠組みに組み込むことで、クィア留学生の承認をめぐるジレンマを、生態学的システムに据えて、包括的に描くことができるだろう。ほかには、クィア留学生が異化や同化にとどまらず、出身国と留学国における文化ないしアイデンティティを統合する方法について、文化適応・バイカルチャー研究から検討することもできるだろう。文化の統合が精神的健康に肯定的な影響を与えるという知見(例えば、Schwartz, Unger, Zamboang, & Szapocznik, 2010) に対し、文化適応そのものが終わりのないプロセスであるという流動性をいかに考えるべ

きか、教育・支援的介入は統合および承認に関する獲得的モデルと流動的モデルの狭間で何を指すべきかなど、検討の余地が多分にあるだろう。

<注釈>

- (1) 「LGBTI Global Acceptance Index (GAI)」は、LGBT のみならず、Intersex (インターセックス・性分化疾患：身体的性が一般的に定められた男性・女性の間もしくはどちらとも一致しない状態、またはその状態にある者) に対する受容度についてもその調査デザインに含んでいる。しかし、日本性分化疾患患者家族会連絡会ネクス DSD ジャパン (2023) は、「両性具有」や「半陰陽」などの表現と並んで、「インターセックス」という語が、『男でも女でもない性別』を連想させるような、当事者が望まない名称であると指摘する。また、同資料内では、LGBT コミュニティと対比させる形で、「インターセックス」がアイデンティティではないことを訴えている。そのため本研究では、GAI に関連する記述のみ「LGBTI」と表記し、その他では「LGBT」と表記することで、性分化疾患の当事者らを、無批判に LGBT コミュニティの一部と見做してしまわぬよう努めた。

<参考文献>

- Berger, L. Peter., & Luckmann, Thomas., 1966, “The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge,” Penguin Books.
- Collie, Philippa., Kindon, Sara., Liu, James., & Podsiadlowski, Astrid., 2010, “Mindful identity negotiations: The acculturation of young Assyrian women in New Zealand,” *International Journal of Intercultural Relations*, Vol.34, No.3, pp.208–220.
- Crenshaw, Kimberlé., 1989, “Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Policies,” *University of Chicago Legal Forum*, Vol.1989, No.8, pp.139-167.
- Flores, Andrea., 2021, “The Succeeders: How Immigrant Youth Are Transforming What It Means to Belong in America,” University of California Press.
- Flores, R. Andrew., 2021, “Social Acceptance of LGBTI People in 175 Countries and Locations 1981 to 2020,” UCLA Williams Institute School of Law.
- Goffman, Erving, 1959, “The presentation of self in everyday life,” Doubleday.

- Herridge, S. Andrew., Al-Sharif, Ann Bodine. Mary., Leong, Chelle. Mi., & Garcia, A. Hugo., 2023, "LGBTQIA+ International Students and Socioemotional Well-being: Impact of Intersectionality on Perceived Experiences and Campus Engagement," *Journal of International Students*, Vol.13, No.2, pp. 95-113.
- Herridge, S. Andrew., Garcia, A. Hugo., & Leong, Chelle. Mi., 2019, "Intersectionality of Lesbian, Gay and Bisexual International Students: Impact of Perceived Experience on Campus Engagement," *Journal of the Study of Postsecondary and Tertiary Education*, Vol.4, pp.49-65.
- Honneth, Axel, 1996, "The Struggle for Recognition: The Moral Grammar of Social Conflicts," Mit Press edition. (=2014, 山本啓・直江清隆訳『承認をめぐる闘争：社会的コンフリクトの道徳的文法』法政大学出版局).
- Hotta, Jean., & Ting-Toomey, Stella., 2013, "Intercultural adjustment and friendship dialectics in international students: A qualitative study," *International Journal of Intercultural Relations*, Vol.37, No.5, pp.550-566.
- Jones, R. Susan., & Abes, S. Elisa., 2013, "Identity development of college students: Advancing frameworks for multiple dimensions of identity," Jossey-Bass.
- Nguyen, Hoa., Gafsky, Erika., Lambert-Shute, Jennifer., 2017, "The Experiences of Lesbian, Gay, Bisexual, and Queer International Students: A Systematic Review," *Journal of Underrepresented & Minority Progress*, Vol.1, No.1, pp.80-94.
- 日本学生支援機構, 2022, 『大学等における学生支援の取組状況に関する調査（令和3年度（2021年度））結果報告』。
- 日本性分化疾患患者家族会連絡会ネクス DSD ジャパン（2023）「DSDs とは何ですか？」
<https://www.nexdsd.com/dsd>（最終閲覧日 2024/01/17）
- Oba, Yoshitaro., & Pope, Mark., 2013, "Counseling and Advocacy with LGBT International Students," *Journal of LGBT Issues in Counseling*, Vol.7, pp.185-193.
- 大西晶子, 2019, 「国境を超えた留学生の受入れー性的マイノリティ学生支援における留意点」『留学生交流・指導研究』第22集, pp.7-15.
- Portes, Alejandro., & Rumbaut, G. Rubén., 2014, "Immigrant America: A portrait. 4th ed.," University of California Press.
- Poynter, John. Kerry., & Washington, Jamie., 2005, "Multiple Identities: Creating Community on Campus for LGBT Students," *New Directions for Students Services*, Vol.2005, No.111, pp.41-47.
- 佐藤郁哉, 2008, 『質的データ分析法 – 原理・方法・実践』新曜社。
- Schwartz, J. Seth., Unger, B. Jennifer., Zamboanga, L. Byron., & Szapocznik, José., 2010, "Rethinking the Concept of Acculturation: Implications for Theory and Research," *Am Psychol*, Vol.65, No.4, pp. 237-251
- Stepick, Alex., Grenier, Guillermo., Castro, Max., & Dunn, Marvin., 2003, "This land is our land: Immigrants and power in Miami," University of California Press.
- 砂川秀樹, 2018, 『カミングアウト』朝日新書。
- Swann, B. William., 1987, "Identity Negotiation: Where Two Roads Meet," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.53, No.6, pp.1038-1051.
- Ting-Toomey, Stella., 1986, "Interpersonal Ties in Intergroup Communication," W.B. Gudykunst ed., *Intergroup communication*, Edward Arnold, pp. 114-126.
- Ting-Toomey, Stella. 2017. "Identity Negotiation Theory," J. M. Bennett. *The International Encyclopedia of Intercultural Communication*, Sage, pp.418-422.
- 上野千鶴子, 2005, 「序章 脱アイデンティティの理論」
上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房, pp.1-41.
- Valosik, Vicki. 2014. "Supporting LGBT International Students," NAFSA Foreign Students Affairs, pp.48-51.
- Willen, S. Sarah., & Cook, Jennifer. 2016. "Health-Related Deservingness," F. Thomas ed., *Handbook of migration and health*, Edward Elgar Publishing, pp.95-118.
- 全国大学生協連合会, 2019, 「性的マイノリティと大学の対応、学生の実情」『Campus Life』第58集, pp.5-7.